

中国では去る八月一日の建軍節に、元人民解放軍総参謀長の羅瑞卿が復活して注目を浴びた。羅瑞卿はかつて文化大革命初期に、中国の公式論調においても激しく非難されて失脚した軍最高首脳であるが、いわゆる林彪・羅瑞卿論争を知る者にとっては、林彪が最大の逆賊として葬られた今日、その復権はいわば当然のこととして受けとめられよう。

文革直前の一九六五年五月、羅瑞卿総参謀長は「ドイツ・ファシストにたいする勝利を記念

●外交時評

中国内政の不協和音

中嶋嶺雄 (東京外国語大学助教授)

し、アメリカ帝国主義と最後までたたかいてぬこう」と題する論文(『紅旗』一九六五年第五号)で対独戦勝利の教訓を強調し、ベトナム戦争に見られるアメリカ帝国主義の脅威にたいしてはソ連を含む広範な国際統一戦線を形成し、「積極的防禦の戦略」をとるべきだと主張した。これにたいして、当時の林彪国防部長は、有名な「人民戦争の勝利万歳」と題する論文を同年九月に発表し(『人民日報』一九六五年九月三日)、毛沢東軍事思想を前面に押し出して、「世界の農村」から「世界の都市」を包囲する「攻

勢的包囲の戦略」を主張し、ソ連との統一戦線を拒否する毛沢東戦略によって、明らかに羅瑞卿を批判したのであった。この論争は文化大革命において羅瑞卿の失脚をもたらし、彼は「彭徳懐分子」として激しくヤリ玉にあげられたのである。

このような経緯があっただけに、林彪異変を経た今日、多くの旧幹部が復活するなかで羅瑞卿の復活が期待されていたのであるが、八月十日北京発のロイター電は、杭州での最近の混乱



事件に軍が介入したことを伝え、同じ日のAFP電が伝えるところによると、北京では最近、在北京外国公館にあてて急進派のものと思われる文書が配られ、鄧小平・副総理ら復活幹部を批判し、江青夫人を擁護する趣旨が記されていたという。この文書は、伝えられるかぎりで見ると、文革グループないしは急進派によるものと思われるが、この文書の配布にいかなる意図や経緯があるにせよ、北京の中核に依然として「潮流」と「反潮流」の角逐があることを十分に物語っている。いうまでもなく「潮流」とは

内政的には脱文革、旧幹部の復権をはかり、対外的には「革命外交」から「国家外交」への転換をはかろうとする実務派グループ、ないしは行政官僚層であり、これにたいして「反潮流」を鼓吹したのは、たとえば十全大会(一九七三年八月)の状況を見るかぎり、江青、王洪文、姚文元ら急進派の党幹部・イデオログであった。このように見てくると「潮流」と「反潮流」の角逐は、行政官僚と党官僚との角逐とも見えてくるが、去る一月の第四期全国人民代表大会では、十全大会で鼓吹された「反潮流」のスローガンは完全に消滅し、毛・周以後の時代への転換期における政治休戦が暫定的に実現したかと思われたのであった。

しかし、全国人民代表大会直後には、姚文元、張春橋が相次いで重要論文を発表し、次いで去る三月には江青夫人が北京で中国の領事級以上の外交幹部を集めて外交問題での講話をおこない、周恩来総理のお株を奪うばかりの積極性を示すなど、北京の政治的ふん囲気は依然として熱っぽかったのである。

アジアの新しい冷戦ともいわれる中ソ対立が激化しつつあるときだけに、中国内政にうかがえる不協和音が今後どのように増幅するのか、それとも、毛・周以後の時代への移行期がもたらす政治的要請によって、このまま沈静化するかかどうか、大いに注目すべきところであろう。